

琉球大学学術リポジトリ

与那国語におきた音韻変化

メタデータ	言語: 出版者: 琉球アジア社会文化研究会 公開日: 2014-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: かりまた, しげひさ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/28315

与那国語におきた音韻変化

かりまたしげひさ

1. はじめに

日本最西端の与那国語は、茎接近音（半母音）の*jと唇軟口蓋接近音*wの両方が破裂音に変化した方言としてよく知られる。また、南琉球諸語にあって、無声破裂音に喉頭音化した子音と喉頭音化しない子音の音韻的な対立があることでも知られる。しかし、与那国語は、他の南琉球諸語、あるいは、北琉球諸語にみられない、さまざまな音韻変化がおきている。本稿は、与那国語でどのような音韻変化がおきたのかをつぶさにみることをとおして、与那国語におきた音韻変化の要因をさぐり、現在の音韻体系がどのようにして形成されたのか、あるいは現在の音韻体系がどうであるかを考察するためのおぼえがきである。

2. 母音変化と子音変化

ある特定の性質を有していたものがことなる性質を有するものへ変わることを「変化」というなら、音韻変化は、特定の調音=音響=聴覚的な特徴（以下、韻質）をもったフォネームの韻質の一部、あるいは全部が何らかの要因によって変化し、それまでとはことなる韻質をもったフォネームになることである*1。

フォネームは、その韻質のちがいによって母音と子音に大別される。音韻変化も母音変化と子音変化に大別される。おおくのばあい、母音は母音に変化し、子音は子音に変化するのだが、琉球諸語のばあい、母音が子音に変化することもあるし、子音が母音に変化することもある。本稿では母音が変化することを母音変化といい、子音が変化することを子音変化という。

母音変化には、母音を発するときの口のひらきの広狭の変化によって、広母音の狭母音化、狭母音の広母音化があり、舌の最高点の位置の前後への変化によって中舌母音の前舌母音化、中舌母音の奥舌母音化がある。おおくは狭母音化、前舌母音化（あるいは前舌化）のように変化したあとの性質でよばれる。

子音変化には、子音の調音方法の変化によって、破裂音の摩擦音化、接近音の摩擦音化などがある。子音の調音点の変化によって両唇音の唇歯音化、軟口蓋音の歯茎音化などがある。また、子音を発するときの声門の状態の変化によって、

*1 琉球諸語でおきた音韻変化の要因については、上村幸雄(1989)、かりまた(2009)、同(2006)を参照。

有声子音の無声子音化、無声子音の有声子音化とがある*2。琉球諸語のばあい、発声にさいして喉頭音化していない通常の子音が喉頭の緊張をともなって声門が完全にあるいは部分的に閉鎖されて調音される喉頭音化がみられる。また、喉頭音化した子音の喉頭の緊張の解除によって喉頭音化されなくなる脱喉頭音化の音韻変化もみられる。

3. 条件的変化と自立的変化

フォネームは、文を構成する単語あるいは単語の文法的な形のなかに存在する。琉球諸語のおおくの下位方言のフォネームは、子音フォネームと母音フォネームがたく結合して音節を形成し、その音節が1個、あるいは2個以上くみあわさって単語を形成する。前後のフォネームから相対的に独立しておきる音韻変化と、音節を形成しながら前後のフォネームとの相互作用のなかでおきる音韻変化とがある。前者が「自立的変化 spontaneous change」であり、後者が「条件的変化 conditioned change」である。

条件的変化は、前後するふたつのフォネームの一方から他方への、あるいは相互の影響のもとに、一方のフォネームの韻質の一部あるいは全部がもう一方に付与されて韻質に変化をもたらしたり、あるいはふたつのフォネームが相互に韻質を交換して変化したりする音韻変化である。条件的変化は、前後に配置されたフォネームの相互作用によって生じていて、その韻質に依存し条件づけられている。

自立的変化は、条件的変化によらずに引きおこされる、前後に配置されたフォネームから相対的に独立した音韻変化である。条件的変化による狭母音化や広母音化もあれば、自立的変化による狭母音化や広母音化もあるし、条件的変化による摩擦音化や両唇音化もあれば、自立的変化による摩擦音化や両唇音化もある。

自立的変化が前後のフォネームから相対的に独立した音韻変化であるとはいつても、単語を構成する音節構造のなかで個々のフォネームが孤立して存在しているわけではない。前後に配置されたフォネームは、相互に密接にむすびついていて、当該のフォネームの音韻変化のための、すなわち、自立的変化がおきるための音環境・条件を提供していて、間接的に影響をあたえている。自立的変化と条件的変化は、性格のことなる音韻変化であるが、特定の音環境をもった単語の

*2 音環境によって母音も無声音化するが、ほとんどはアロフォンとしてあらわれる。無声音化した母音が後続の子音を無声子音化させる重要な音環境として機能することもあるし、語頭の無声音化した母音の無声性が声門摩擦音 h として音分割されることもある。h の語頭音挿入については、かりまた(2009, p. 302)を参照。また、宮古語大神島方言においては無声音化した母音が無声音化しない母音と音韻論的な対立をしめす。宮古語大神島方言については かりまた(1993a)、かりまた(1993b)を参照。

なかで条件的変化と自立的変化が連続しておこり、一方がもう一方をひきおこすための条件や音環境をつくりだしているばあいもある。複合語や派生語をふくむ単語や単語の文法的な形のなかで生起する自立的変化と条件的変化の連続と複合をていねいにみていくことによって、音韻変化のおきた順序をしる手がかりを得ることができるし、現在の状態を理解するのに必要である。

4. 音融合、音消失、音分割、音挿入

フォネームが単語のなかで他のフォネームとの *syntagmatic* な関係をつくるなかで音韻変化した結果、単語の内部でのフォネームのふるまい方、あるいはフォネーム同士の関係のし方にも変化が生じる。単語の内部でのフォネームのふるまい方、前後するフォネームの関係のし方の変化を音挿入、音消失、音融合、音分割などのタイプにわけることができる。これらの現象は、ごくかぎられた少数の単語におきることもあるし、条件をおなじくする音環境のアロフォンにおきることもある。

音融合とは、前後に連続する2個のフォネームが1個のフォネームに融合する現象である。音消失とは、連続するフォネームの1個が消失する現象である。消失するフォネームの単語内での位置によって語頭音消失、語中音消失、語末音消失がある。音分割とは、1個のフォネームが2個のことなるフォネームに分割される現象である。音挿入とは、連続する2個のフォネームの中間に別のフォネームが発生して挿入されたり、あるフォネームの前に、すなわち単語の語頭に別のフォネームが挿入されたり、あるいは、あるフォネームの後ろに、すなわち語末に別のフォネームが挿入されたりする現象である。挿入されるフォネームの位置によって語頭音挿入、語中音挿入、語末音挿入がある。

音融合、音消失、音分割、音挿入によって、それまでは存在しなかったあらたなフォネームが生成されることもあるし、既存のフォネームの数が減ずることもある。既存のフォネームがあらたな音節形成能力を付与されて、音韻体系の再編がおこなわれることもある。特定の音環境のアロフォンに限定された変化があらたな韻質をもったフォネームの生成とむすびつかず、フォネームの数の増減や音韻体系の再編がおこなわれないばあいもある。

5. 音韻体系の再編

既存のフォネームとの *paradigmatic* な対立のなかにある特定のフォネームがその韻質に変更が生じて音韻変化すると、音韻体系の再編がおこなわれる。それまでには存在しなかったあらたなフォネームが発生することもあるし、既存のフォネームのひとつがなくなってフォネームの数が減ずることもあるし、フォネームの数の増減にはむすびつかないこともある。音韻変化が当該フォネームのすべ

てのアロフォンにおきることもあるし、特定の音環境のアロフォンにかぎっておきることもある。「統合」、「分裂」、「わりこみ」、「置き換え」、「ずれ」のいつつの再編がおこなわれる*3。

A	B	C	D	E
---	---	---	---	---

統合

A	C	D	E
---	---	---	---

分裂

A	B	C	d1	d2	E
---	---	---	----	----	---

わりこみ

A	B	C	D	F	E
---	---	---	---	---	---

置き換え

A	B	C	F	E
---	---	---	---	---

ずれ

A	B	C	D	E
---	---	---	---	---

「統合」とは、あるフォネームの韻質に変更が生じて音韻変化し、既存の別のフォネームとひとつになることをいう*4。また、「分裂」とは、特定のフォネームを構成する一部のアロフォンに変更が生じて音韻変化し、あらたにフォネームが生成されて、ふたつのフォネームに分かれることをいう*5。「わりこみ」とは、あ

*3 借用語のうけいれにともなってそれまでは存在しなかったフォネームが発生することもある。これは音韻変化によらない音韻体系の再編である。「ずれ」「統合」「分裂」「わりこみ」「置き換え」に「追加」をもうける必要があるか検討したい。

*4 与那国語の*o>u、*e>i が母音変化の統合の代表的な例であり、宮古語大神島方言における有声破裂音の無声子音化*b>p、*d>t、*g>k が琉球諸語における子音変化の統合の代表的な例であろう。

p	b	t	d	k	g
---	---	---	---	---	---

統合

p	t	k
---	---	---

*5 沖縄島今帰仁方言などの奄美南部沖縄島北部語にみられる無声破裂音の喉頭音化した子音と口頭音化しない子音への分裂が子音変化における分裂の代表的な例であ

らたな韻質をもったフォネームが発生し、既存の母音体系、あるいは子音体系にわりこんでくる現象をいう。「置き換え」とは、あるフォネームのすべてのアロフォンの韻質に変更が生じて音韻変化し、性質のことなるフォネームにおきかわることをいう*6。「ずれ」とは、あるフォネームを構成する特定のアロフォンの韻質に変更が生じて音韻変化した結果、ことなるフォネームとして分裂するが、そのとき既存の別のフォネームと統合されて母音体系、あるいは子音体系のわけなおしがおこなわれることをいう。

統合は、フォネームの数が減ずるが、分裂とわりこみは、フォネームの数が増加する。ずれは、既存のフォネームのアロフォンの一部に統合と分裂がおきるもので、フォネームの数の増減にはつながらない。置き換えは既存のフォネームのすべてのアロフォンに変更が生じてあらたなフォネームに変化するが、フォネームの数に増減はない。特定の低位方言にこれらいつつの再編のすべて、あるいは一部がおきている。

6. 与那国語の母音変化

与那国語の母音変化には、自立的変化も条件的変化もみられる。母音の自立的変化の代表は、狭母音化である。奥舌半狭母音 o の奥舌狭母音 u への変化や前舌半狭母音 e の前舌狭母音 i への変化もみられる。狭母音化の要因、変化過程などについてはかりまた (2009)、かりまた (2006) でくわしく論じたのでそちらを参照いただきたい。*i と *u に韻質の変化はみられないが、*i と *u は、さまざまな音環境で音消失し、与那国語の音韻的特徴をうみだす要因になっている。*i と *u の音消失も重要な自立的変化である。

6.1. 母音の自立的変化

与那国語の狭母音化には、*o>u、*e>i がみられる。与那国語の狭母音化で特

らう。

p	b	t	d	k	g
---	---	---	---	---	---

分裂

p'	p	b	t'	t	d	k'	k	g
----	---	---	----	---	---	----	---	---

*6 北奄美語名瀬方言における摩擦音化による p>h が子音変化のおきかえの代表的な例であろう。

p	b	t	d	k	g
---	---	---	---	---	---

おきかえ

h	b	t	d	k	g
---	---	---	---	---	---

徹的なのは、二重母音*au、*aoの同化によって発生したoも狭母音化してuに変化していることである。これは与那国語以外の他の琉球諸語にはみられないものである。もうひとつの特徴は、先述したように、狭母音*i、*uの音消失である。宮古諸語、八重山諸語にも*i、*uの音消失はみられるが、与那国語では宮古諸語、八重山諸語以上にさまざまな音環境の*i、*uが音消失し、さまざまな音韻変化をおこしている。

6.1.1. 奥舌半狭母音 o の奥舌狭母音 u への狭母音化 / *o > u

*o > u は、結合する子音の韻質の如何にかかわらず語頭、語中、語尾いずれの位置でも起きている。*o > u は、つよい呼気流によって舌全体とそのもりあがりの最高点が前寄りに移動した変化であり、それにとまって口のひらきの広狭も変化している。狭母音化の結果、*oの既存のuへの統合がおきている。

ʰɸu (穂)、t'u (人)、ujant'u (鼠)、ujagint'u (金持ち)、tuŋ (妻刀・自)、ha't'u (鳩)、mugu (婿)、kui (声)、ɸuni (骨)、tʒimu (肝)、butu (夫)、buriruŋ (折れる)、uja (親)、umuti (表)、uŋ (鬼)、sugu (底)、suba (側)、kugunutʃi (九つ)、midu (溝)、kudu (去年)、turi (西)、tunai (隣)、duru (泥)、duk'u (葺)、budui (踊り)、nunu (布)、bunu (斧)、mumu (腿)、duru (夜)、dumi (嫁)、duku (横)、ɸu: (帆・穂)、ɸutʒi (星)、nsu (味噌)、diru (地炉)、nnuŋ (角)、iju (魚)、

琉球諸語の二重母音*ao、*auは、一部に相互同化しないauを残しながら、相互同化した*ao、*auが長母音o:であられ、さらにo:が狭母音化してuに変化している。uは一部に長母音もみられるが、おおくは短母音であられていて、長短の区別が失われたものとかんがえる。

su (竿)、tuŋ (通す)、ubai (銀蠅・青蠅の意)、ɸut'a (包丁)、dunut'i (門)、du:suku (蠟燭)、basu (芭蕉)、sudi (障子)、

6.1.2. 前舌半狭母音 e の前舌狭母音 i への狭母音化 / *e > i

*e > i も、結合する子音の韻質の如何にかかわらず語頭、語中、語尾いずれの位置でも起きている。南琉球諸語の全体でおきている*e > i には、北琉球諸語のようなiを経た形跡がみられない。*e > i もつよい呼気流によって舌全体とそのもりあがりの最高点が前寄りに移動しているだけでなく、口のひらきの広狭も変化している。狭母音化の結果、*eの既存のiへの統合がおきている。

「ki'~ki (毛)、^ki'~ki (木)、^ti'~ti (手)、^mi'~mi (目) ^ni:~ni (根)、
 ni (子)、^çi'~çi (尻)、ŋgi (棘)、ŋgi (髭)、tagi (竹)、sagi (酒)、ɲɲi
 (船)、dumi (嫁)、ɸuni (骨)、kibuntzi (煙)、tiŋ (天)、udi (腕)、sudi
 (袖)、ɸudi (箠)、ubuɲi (大根)、dimami (落花生)、nabi (鍋)、dubi (昨
 夜)、kui (声)、mai (前)、çira (へら)、kadi (風)、diŋ (錢)、afi (汗)、

6.1.3. 前舌狭母音 i/*i>i

*i に対応する与那国語の母音は i であり、*e から変化した i と統合している。
 *i は、南琉球諸語において、とくに宮古諸語において狭母音化して舌先母音 ɿ
 に変化しているか、舌先摩擦音 s あるいは z に変化している。後者の音韻変化は、
 母音の子音変化である。八重山諸語においても舌先母音に変化しているか、舌先
 母音をもたない下位方言にあってもかつて舌先母音化したか、あるいは摩擦音化
 した痕跡をのこして i あるいは u になっている。それに対して、与那国語のばあい、
 *i は i であらわれ、*i が舌先母音化や摩擦音化した形跡はほとんどみられな
 い。

iju (魚)、ija (父)、irara (鎌)、inu (犬)、ai (藍)、nai (地震)、mai (稲)、
 itzi (石)、itzi (いつ)、igutzi (いくつ)、「çi: (女陰)、çiru (ニンニク、蒜
 に対応)、「tzi:~tzi (血)、^tzi (乳)、tзима (島)、ɸutzi (星)、uttzi (牛)、
 butzi (節)、miN (水)、miŋ (耳)、midu (溝)、dimami (落花生)、ɲi (荷)、
 hai (針)、nai (実・*nari に対応)、bunai (をなり)、ndai (左)、diru (地
 炉)、ɲidi (右)、

*e から変化してきた i と統合した i (<*i) は、韻質という点では変化してい
 ないようにみえる*7。しかし、*i が前舌狭母音であったという韻質によって、結
 合する子音に破擦音化、破裂音化、摩擦音化、鼻音化などの自立的変化をひきお
 こす重要な音環境をつくりだして、前後のフォネムにおおきな影響をあた
 え、*dʒi>di、*pi>tʒi、*ki>tʒi、*ɸi>-tʒi などの子音変化や、*ri>i、*gi
 >ŋ、*mi>ŋ のような子音の消失や母音の消失をおこしている。詳細は次節の
 子音変化の項で詳述。

*7 石垣方言では*i が摩擦音 z に変化したあとに z は i にもどっているが、idzu (魚)
 のように後続の子音を摩擦音に変化させさらに破擦音化させていて、i>z の変化が
 あったことがわかる。しかし、与那国語のばあい、iju (魚)、ija (父)、irara (鎌)
 であらわれ、i>z (~ɿ) の変化があったかどうかは、不明であり、あるいは、i>z
 (~ɿ) の変化はなかった可能性もある。

6.1.4. 奥舌狭母音 u/*u>u

与那国語の *u に対応する母音は u であり、*o から変化した u と統合している。

u'tʃi (牛)、ut'u (音)、uta (歌)、ui (上)、nunu (布)、nutʃi (主)、inu (犬)、mutʃi (虫)、mugu (婿)、muN (麦)、mura (村)、ɸuju (冬)、ɸudi (箆)、duga (床)、^hdu:~du (湯)、duru (夜)、kubu (昆布)、ɕiru (ニンニク、蒜に対応)、tʃimugut'i (胸)、du:suku (蠟燭)、

*o から変化してきた u と統合した u (<*u) は、韻質という点では変化していないように見える*⁸。しかし、*u が奥舌狭母音であったという韻質によって、摩擦音化、鼻音化などの自立的変化をひきおこす重要な音環境をつくりだしていて、前後のフォネームにおおきな影響をあたえている。

ɸura (鞍)、ɸun (釘)、ɸurusat'a (黒糖)、
ŋkatʃi (昔)、nna (綱)、mmi (爪)、mbutʃi (膝)、mmu (雲)、mmuŋ (組む)、ɲɲiŋ (九年母)、ɲɲi (船)、ŋgui (率丸)、

6.1.5. 広母音 a/*a>a

広母音 a には韻質の変化がみられない。また、a と結合する子音が a の韻質に由来するような影響をうけた音韻変化もみられない。

^hha: (歯)、^hha· (葉)、hana (花)、hat't'u (鳩)、hai (蠅)、haŋ (足)、
^hka: (皮)、kagaŋ (鏡)、kadi (風)、ma'tʃi (松)、mai (稲)、basu (芭蕉)、bata (腹)、tagi (竹)、aʃi (汗)、ai (藍)、nabi (鍋)、nai (地震)、nai (実)、tʃira (顔)、nuda (涙)、mma (馬)、tʃima (島)、^hda· (家)、
duda (枝・古)、dimami (落花生)、sagi (酒)、

6.1.6. 狭母音化以外の母音の自立的変化

nuda (涙)、

*⁸ 宮古島方言では語頭に単独であられる *u、*g、*b、*k、*p と結合した *u が摩擦音化して v に変化し、先行の *g、*b、*k、*p を摩擦音化させて v、f に摩擦音化したり、後続の r を v、f に変化させているが、与那国語には同様の現象はみられないようである。もうすこし語例をふやして検討したい。

6.1.7. 母音の消失

語頭、語中の狭母音の *i、*u の音消失がみられる。音消失にともなって、あるいは音消失とともに、破裂音、破擦音の鼻音化がおきているし、母音と結合した無声破裂音、無声摩擦音の音節の消失があって、後続音節の子音の喉頭音化を引きおこしている。

6.1.7.1. 語末音消失

語末の母音 *i、*u が消失し、先行子音の *m、*n、*dz、*g が鼻音化している。

miŋ (耳)、tzaŋ (風)、kagaŋ (鏡)、diŋ (銭)、miŋ (水)、tuŋ (妻・刀自)、
muŋ (麦)、ɸuŋ (釘)、uŋ (扇)、haŋ (足)、karaŋ (髪)、

6.1.7.2. 語中音消失

語中の母音 *i、*u が消失し、*pi、*pu、*ki、*ku、*tsu、*si、*su が鼻音化している。

ndai (左)、ŋgi (髭)、ŋji (船)、ŋgui (塞丸)、nnu (昨日)、mmu (雲)、
mmuŋ (組む)、ŋjiŋ (九年母)、nna (綱)、mmi (爪)、mbutzi (膝)、mbi
(尻)、mba (唇)、ndai (簾)、mbai (小便)、nnirun (死ぬ)、mburu (ユ
ウガオ)、
nsu (味噌)、ŋkatzi (昔)、ndu (溝)、ŋgana (苦菜)、
tzaŋ (風)、ʰt'a (舌)、

語中の母音 *i、*u の消失とともに、先行子音 *p、*k、*ts、*s も消失している。それと連動して第二音節目の無声破裂音 *t、*k、*ts が喉頭音化している。喉頭音化した t'、k'、tz の発生は、*t、*k、*ts から喉頭音化した t'、k'、tz と喉頭音化しない t、k、ts への分裂である。

t'u (人)、t'u:ɬfi (一つ)、t'ui (一人)、k'u (肺)、t'a (蓋)、k'uru (袋)、
t'a:ɬfi (二つ)、t'ai (額)、t'i (口)、t'ibuŋi (口)、tza (草)、tzu (糞)、k'
umuN (包む)、k'uju (月、月夜に対応)、t'i (月)、k'imunu (漬物)、t'a (舌)、

6.2. 母音の同化

6.2.1. 歯茎摩擦音、歯茎破擦音と母音の同化

歯茎摩擦音 s、破擦音 ts、dz と結合した奥舌狭母音 *u は、i であらわれている。奥舌から前舌への変化であり、それにとまって、先行子音が口蓋音化している。*u も i も狭母音なので、この音韻変化は狭母音化とはいえない。*u > i の変化が歯茎摩擦音 s、破擦音 ts と結合するばあいには限定されるので、s、ts の影響を受けた変化であり、同化のひとつではないかとかんがえる。

*su > tʃi

tʃitʃi (煤)、^htʃi: (巢)、tʃidiri (硯)、utʃi (臼)、

*tsu > tʃi

tʃira (顔)、ma^htʃi (松)、^rtʃi (釣り針)、itʃi (いつ)、igutʃi (いくつ)、

*(d)zu > dʒi > di

kidi (傷)、tʃidiri (硯)、

6.2.1.1. 母音の同化／鼻音化

語頭に単独であられる母音が後続する鼻音 m、n の影響によって鼻音化している。後続の鼻音の逆行同化であろう。後続の鼻音 m、n の調音方法（鼻音性）と調音点（両唇、歯茎）の移動とが語頭の母音に付与されておきた変化であろう。

*uma > ūma > mma、*ini > ĩni > nni

mma (馬)、ɲni (玄米・稲に対応)、ndibuŋ (出ている)、

6.2.1.2. 二重母音の同化 *au > o > u、*ao > o > u

与那国語は、e > i、o > u の狭母音化、ao > o > u、au > o > u の母音同化と狭母音化、ae > ai、ai > ai などの非同化の結果、完全な 3 母音体系に移行した方言で、琉球諸語のなかで、そして、日本語諸方言のなかで母音の数のもっともすくない方言である。

su (竿)、bu (棒)、tu (唐)、uŋ (扇)、kudi (麴)、ɸut'a (包丁)、ɸutt'i (箒)、duŋut'i (門)、du:suku (蠟燭)、basu (芭蕉)、sudi (障子)、guja (苦瓜)、tubu (豆腐)、

6.2.1.3. 二重母音の非同化 *ai > ai、*ae > ai、*ue > ui

hai (蠅)、ui (上)、ai (藍)、nai (地震)、mai (稲)、

6.3. 母音の狭母音化と同化

与那国語の母音は、狭母音化と同化によって以下の変化がおきている。

- (1) 狭母音化によって *e と *i が統合。
- (2) 狭母音化によって *o と *u が統合。
- (3) *u が歯茎摩擦音 s、歯茎破裂音 ts、dz との同化によって *i に変化し、*u の一部に分けなおしがおこなわれて *i に統合（ずれ）。
- (4) *au、*ao が同化によって融合し o に変化したが、狭母音化によって *u と統合。
- (5) *ae の e は狭母音化して i に変化したが、*ai とともに同化せず二重母音のまま。
- (6) 1 音節語の母音はなが母音であられるものもあるが、みじか母音であられることもある。
- (7) *au、*ao が同化によってできた u もみじか母音であられる。

与那国語の感動詞や対応語形の不明な単語に e、o があられるが、与那国語の母音体系は、狭母音化と同化による音韻変化の結果、母音の統合とずれのフォネームの分けなおしがおこなわれて、3 母音体系になったとかがえる。原則として母音の長短の対立もなかったとかがえる。

a	u		i
---	---	--	---

7. 与那国語の子音変化

与那国語では語頭の無声子音に後続する *u が無声音化し、さらに後続の無声破裂音を喉頭音化させた後に消失した結果、語頭に喉頭音化した無声破裂音が生じている。

7.1. 子音の自立的変化

与那国語にみられる子音の自立的変化には、破裂音化 (*w > b、*j > d、*dz > d、*tʃ > t)、破擦音化 (*ki > tʃi、*pi > tʃi、*ʃi > tʃi、*su > tʃi)、摩擦音化 (*p > h、*k > h)、鼻音化、有声子音化がみられる。

7.1.1. 破裂音化

与那国語の破裂音化には、接近音の破裂音化 (*w > b、*j > d) と破擦音の破裂音化 (*dz > d、*tʃ > t) とがある。

7.1.1.1. 両唇接近音の破裂音化 / *w>b

南琉球諸語では *w>b の変化がおきているが、両唇接近音 w の調音的な特質は奥舌狭母音 u と共通で、u が後続する母音と結合して音節をひらく位置にたち、音節副音として子音として機能しているとみることができる。w の空気力学的な特徴も u とおなじとみることができる。すなわち、u と w は声道がせまく、音響管としての効率のわるさから、広母音とおなじ程度のきこえを保証するためには、よりつよめの呼気をもって発音されなければならない。もし、つよい呼気の特徴とする南琉球諸語にあって、せまい声道をつよい呼気がながれ、両唇で調音される w がつよい呼気に対抗する唇の「ふんばり」によって緊張が増して摩擦がつよくなれば、接近音 w から摩擦音 β をへて、破裂音 b に変化したとかがえられるのである。

bata (腹)、butu (夫)、buriruN (折れる)、bunai (をなり)、bigi (えけり)、karabada (軽業)、

語頭の *w は破裂音化して b に変化しているが、いくつかの例外をのぞいて語中での *w>b はみられない。古代日本語の語中の *w は、現代語では a と結合する *w- をのぞいて失われているが、南琉球諸語をふくむ琉球諸語全体で語中の *w- を失っている。琉球諸語のばあい、a と結合する -w- も消失している。

a~a: (泡)、tara (俵)、ai (藍)、nai (地震)、su (竿)、u:bai (銀蠅・青蠅)、mju:tu (夫婦)、

日本語では語中母音間の *-p- が -φ- を経て、-w- に変化した (いわゆるハ行転呼音) が、その -w- もワ行子音の w と統合され、やはり、a と結合するばあいをのぞき、現代語では消えている。琉球諸語でも、同様の変化 (*-p->-φ->-w-) が起こったとみられ、ワ行子音の w とおなじく語中の -p- のほとんどが音消失している。南琉球諸語の *w>b の変化は、語中 w の消失のあとにひきおこされたあたらしい変化であるとかんがえられる。

7.1.1.2. 歯茎接近音の破裂音化 / *j>d

与那国語では歯茎接近音 *j が破裂音化して d に変換し、既存の d と統合している。*ju>du、*ja>da、*jo>du は、母音の如何をとわない変化であるが、語頭にかぎられており、語中の j は破裂音化していない。dakkan (薬缶) などの漢語や複合語の後要素 hadasai (葉野菜) でも破裂音化がみられる。

da: (家)、dama (山)、damuŋ (痛む)、damat'u (大和)、dumi (嫁)、duru (夜)、duda (枝)、duga (四日)、dudai (涎)、dutti (斧・ヨキ)、duguŋ (憩う)、du: (湯)、dumuŋ (読む・数える)、dwai (祝い)、dakkaj (葉缶)、hadasai (葉野菜)、

複合語の後要素をのぞく、語中の j は d に変化していない。後述するように * d_3 の破裂音化は語中でもおきているので、語中の j は摩擦音化しなかったのである。

uja (親)、maju (眉)、ujubi (指)、iju (魚)、ujantu (鼠)、aja (蟻)、kubuja (蝙蝠)、dudaja (ナメクジ)、guja (苦瓜)、majju (猫)、t₃iju (露)、

* $j > d$ は、* $w > b$ とはことなり、与那国語でしかおきていないし、与那国語でも呼気をつよまりによる狭母音化と並行して、歯茎接近音 * j が摩擦音化して $ʒ$ になったとかんがえる。有声の歯茎摩擦音 $ʒ$ と歯茎破裂音 d_3 の音韻的対立のない与那国語にあって、語頭の歯茎摩擦音 $ʒ$ は歯茎破裂音 d_3 と統合されたのであろう。与那国語は、後述するように歯茎破裂音 d_3 の破裂音 d への自立的変化がおきていて、統合した d_3 が破裂音化したのであろう。

与那国語では半母音 j を d に変化させているが、この変化が * $j > ʒ > d_3 > d$ という過程を経ているとするなら、与那国語でもつよい呼気流が語頭の j を摩擦音化させたであろう。また、他の南琉球諸語とおなじように $w > b$ の変化もみせているので、与那国語の呼気がかつてつよかったのであろう。

7.1.1.3. 有声歯茎破裂音の破裂音化 / * $dz > d$

有声の歯茎破裂音の破裂音化 * $dz > d$ が語頭でも語中でもみられる。母音の * i 、* e 、* o 、* a と結合した子音は破裂音化しているが、* u と結合した dz の破裂音化した例は確認できていない。

dimami (落花生)、diru (囲炉裏)、çit₃idi (未)、sudi (障子)、nsudiru (味噌汁)、kudi (翅)、diŋ (銭)、kadi (風)、kidi (傷)、du: (門)、duŋut'i (門)、midu (溝)、kudu (去年)、du: (尾)、karabada (軽業)、kada (匂い)、kadan (蚊)、

7.1.1.4. 有声奥舌軟口蓋破裂音の歯茎破裂音化 / * $gi > di$

用例がすくないので、断言はできないが、*gi>di の変化がおきている*⁹。

diba (籐)、jidi (右)、

7.1.1.5. 有声両唇破裂音の歯茎破裂音化 / *bi>di

用例がすくないので、断言はできないが、*bi>di の変化がおきている。

di: (蔘草)、

7.1.1.6. 無声歯茎摩擦音の破裂音化 / *tʃ>t

無声の歯茎摩擦音の破裂音化 *tʃ>t が語中でみられる。

t'i (口)、itigu (従兄弟)、ujantu (鼠)、φut'a (包丁)、t3imugut'i (胸)、
dunut'i (門)、

7.1.1.7. 無声歯茎摩擦音の破裂音化 / *ʃi>ti

語中の無声の歯茎摩擦音の破裂音化 *ʃi>ti がみられる。語頭、および語中で摩擦音が破裂音化した語例がおおいので、摩擦音 *ʃ が摩擦音化して既存の摩擦音と統合したあとに、破裂音化したものと解される。語例がすくなく、なお検討を要する。

tut'i (年)、

7.1.1.8. 無声奥舌軟口蓋破裂音の歯茎破裂音化 / *ki>ti

無声の奥舌軟口蓋破裂音の歯茎破裂音化 *k>t が語中でみられる。調音点の移動だけの変化に見えるが、語頭の *ki>t3i とあわせて考察すると、*ki>t3i の変化が先にあり、そのあとで t3>t がおきたのであろう。*tʃ が語頭で維持され、語中では破裂音化 *tʃ>t する変化と連動する変化であり、*ki から変化した t3i が語頭と語中で統合し、語中の *tʃ が t に変化したのであろう。

*⁹ kudi suŋ (漕いでくる)、kuditi (漕いで)、kuditaŋ (漕いだ)、kudjaŋ (漕いだ) のように語尾に i を有する g 語幹動詞の活用形でも同様の *gi>di の変化が起きている可能性がある。いっぽう、ambiti (遊んで)、ambi ku (遊んで来い) のように b 語幹動詞の活用形では *bi>di はおきていないように見える。語例を増やして検討したい。

sati (先)、tuti (時)、iti (息)、itimutzǐ (生物)、dutti (斧・ヨキ)、 ϕ utt'i (筭)、

7.1.2. 破擦音化

与那国語の破擦音化には、無声破裂音の破擦音化 $*ki > tʃi$ 、 $*pi > tʃi$ と無声摩擦音の破擦音化 $*ʃi > tʃi$ 、 $*su > tʃi$ とがある。なお、前節でのべた破裂音化のおおくも破擦音化をへたのちに破裂音化したと解されるもののおおい。

7.1.2.1. 歯茎摩擦音の歯茎破擦音化 / $*ʃi > tʃi$ 、 $*su > tʃi$

無声の歯茎摩擦音の歯茎破擦音化が語頭でも語中でもみられる。

tʃima (島)、tʃitʃi (肉)、tʃiru (汁)、uttʃi (牛)、butʃi (節)、 ϕ utʃi (星)、
nutʃi (主)、mutʃi (虫)、kibuntʃi (煙)、
tʃi: (巢)、tʃitʃi (煤)、tʃiɲi (脛)、tʃinaŋ (砂)、utʃi (臼)、tʃidiri (硯)、
tʃaŋ (虱)、tzu (白)、tzuiru (白色)、tsa (下)、

7.1.2.2. 奥舌軟口蓋破裂音の歯茎破擦音化 / $*ki > tʃi$

奥舌軟口蓋破裂音の破擦音化 $*k > tʃ$ は、語頭でのみみられ、しかも結合する母音が *i* の時に限定されている。語中の $*ki$ は、先述したように破擦音化して $tʃ$ に変化したのちに破裂音 *t* に変化している。tzuŋ (切る) などは、 $*kir > ksr > tʃr > tʃs > tʃ$ のような破擦音化のあとに進行同化と音消失がおこったものとかんがえる。

tʃimu (肝)、tʃimugut'i (胸)、tʃiri (霧)、tʃitʃuŋ (切り倒す)、
tʃuŋ (切る)、tʃanuŋ (切らない)、

7.1.2.3. 両唇破裂音の歯茎破擦音化 / $*pi > tʃi$

両唇破裂音 $*pi$ の歯茎破擦音への変化は語頭でのみみられる。語中の $*pi$ はハ行転呼音によって消失していたために、そのような変化はおきなかったのである。tʃuma (昼間・正午) は、 $*pir > psr > tʃr > tʃs > tʃ$ のような破擦音化のあとに進行同化と音消失がおこったものとかんがえる。

tʃi: (火)、tʃi: (日)、tʃi: (樋)、tʃiŋaŋ (彼岸)、tʃiruŋ (干る・潮がひく)、
tʃirumaŋ (珍しい)、tʃuma (昼間)、

破擦音化と破裂音化

*j>d は、先述したように摩擦音化を経た子音変化*j>ʒ>d₃>d である。*tj >t >*d₃>d だけでなく、*j>d は、もちろん、*bi>d₃i>di、*gi>d₃i>di、*ki>t₃i>ti、*pi>t₃i、*fi>t₃i などをもふくめて破擦音化、破裂音化を検討する。

		語 頭		語 中	
		破擦音化	破裂音化	破擦音化	破裂音化
	*dz		*dz>d		*dz>d
	*j	(*j>d ₃)	d ₃ >d		
	*bi	---	*bi>di	---	*bi>di
	*gi	---	*gi>di	---	---
	*tj	t ₃	---		*tj>t
	*ki	*ki>t ₃ i	---	(*ki>t ₃ i)	*ki>ti
	*pi	*pi>t ₃ i	---	---	---
	*fi	*fi>t ₃ i	---	*fi>t ₃ i	*fi>ti

有声の歯茎破擦音の破裂音化*d₃>d と無声の歯茎破擦音の破裂音化*tj>t のちがいは、*d₃>d が語頭でも語中でもおきているのに対して、*tj>t が語中でしかおきていないことである。

*ki>t₃i は、北琉球諸語にみられる*kの後続母音*i*による口蓋音化と破擦音化に似るが、南琉球諸語では、*iに結合する子音は口蓋音化していない。宮古島保良方言などにみられる*k_i>k_s>t_s と類似の破擦音化がおきたのではないだろうか。*pi>t₃i のばあい、*piには破擦音化をひきおこす要素をみつけにくく、*pi>t₃i も*pi>p_s>t₃のような破擦音化がおきたとかがえる。

*bi>di、*gi>diは、調音点の移動だけの子音変化にみえる。しかしおそらくは、*ki>k_s>t₃i、*-ki>-k_s>t₃i>ti、*pi>p_s>t₃ との並行的におきた子音変化であろう。すなわち、*bi>b_z>d₃>di、*gi>g_z>dz>diのような変化過程を経た子音変化である。

*bi>di、*gi>di、*ki>t₃i>ti、*pi>p_s>t₃iの子音変化が*i*と結合するばあいに限定されていることも、破擦音化をかんがえる重要な手がかりである。

有声と無声とにかかわらず、語中破擦音の破裂音化がみられるのに、*fi>t₃iのばあい、語中でも破裂音化がみられないのは、*pi>p_s>t₃i、*ki>t₃i>tiの破擦音化とは子音変化の時期がずれ、t₃iへの統合がおくれたからではないかとかんがえる。もちろん、別の要因も検討してみる必要があるだろう。

7.1.3. 摩擦音化

与那国語の摩擦音化には、破裂音の摩擦音化 (*p>h、*k>h) と破擦音の摩擦音化 (*ts>s) がある。

7.1.3.1. 両唇破裂音の声門摩擦音化 *p>h

与那国語では語頭の無声破裂音 p がすべて h であらわれる。ただし、u と結合するときは φ であらわれ、i と結合するときは ç であらわれる。φ と ç は h のアロフォンである。

haŋi (羽)、hana (鼻)、hana (花)、hada (肌)、hatu (鳩)、hatagi (畑)、
hadaga (裸)、haŋi (禿)、hai (蠅)、ha (歯)、haŋ (足)、
φuŋi (骨)、φɯtʃi (星)、φu: (穂)、φu: (帆)、φuga: (外)、φɯtʃi (箒)、
φɯtʃa (包丁)、φuda (札)、φudi (箎)、φuju (冬)、
çi (尻)、çira (筥)、çitʃu (海豚)、çiru (蒜)、çin (髭)、çitʃidi (末)、

7.1.3.2. 奥舌軟口蓋破裂音の声門摩擦音化 *k>h

奥舌軟口蓋破裂音の声門摩擦音化は、u と結合した *ku のばあいに限られている。これは他の南琉球諸語にみられるものと同じものである。

φura (鞍)、φuŋ (釘)、φuru (黒)、φurusatʃa (黒糖)、

語頭の *ku が音消失しているが、tsa (下)、tʃa (舌)、tzu (白)、tzaŋ (風) などとおなじく、語頭の *ku に無声子音が後続する音環境において、*ku が摩擦音化したあとに音消失したのではないかとかんがえる。

tʃi (口)、tʃibuni (口)、tza (草)、tzu (糞)、tzuri (薬)、

7.1.3.3. 歯茎破擦音 *tʃ の歯茎摩擦音化 *tʃ>s

歯茎破擦音 *tʃ の摩擦音 s への変化がみられる。語例は、漢語の借用語の例でしか確認できていない。いずれも口蓋音化した *tʃ である。

sa (茶)、sabaŋ (茶碗)、

7.1.4. 鼻音化

与那国語の自立的変化による鼻音化には有声の奥舌軟口蓋破裂音の鼻音化 *ga > ŋa、*gu > ŋu、*ge > ŋi、*go > ŋu がある。そのほかに、それぞれの語例はす

くないが、*pi、*pu、*ki、*ku、*tsu、*su の音節の母音消失と子音の鼻音化がみられる。

7.1.4.1. 奥舌軟口蓋破裂音の奥舌軟口蓋鼻音化

奥舌軟口蓋破裂音の奥舌軟口蓋鼻音への変化は、複合語の後要素でもおきている。

anai (東)、kunjai (黄金)、aji (陸)、ta:ŋu (担桶)、danajuti (悪口)、
duŋut'i (門)、tʒimʉut'i (胸)、duŋabu (世界報)、

7.1.4.2. 鼻音化

語頭の*pi、*pu、*ki、*ku、*tsu、*su の母音消失と無声の破裂音、破擦音、摩擦音の鼻音化がみられる。

*pi の音消失と破裂音の鼻音化

ŋgi (髭)、ndai (左)、

*pu の音消失と破裂音の鼻音化

ɲji (船)、nnai (船酔い)、ŋgui (牽丸)、

*ki の音消失と破裂音の鼻音化

nnu (昨日)、

*ku の音消失と破裂音の鼻音化

mmu (雲)、mmuŋ (組む)、ɲɲiŋ (九年母)、

*tsu の音消失と破擦音の鼻音化

nna (綱)、nnuŋ (角)、mmi (爪)、nnuŋ (鼓・太鼓)、mbutzi (膝)、
mbi (尻)、

*su の音消失と破擦音の鼻音化

ndai (簾)、mba (唇)、mbai (小便)、

語末の*gi、*dzu、*dzi の母音消失と有声の破裂音、破擦音の鼻音化がみられる。

*gi の音消失と破裂音の鼻音化

haŋ (足)、muŋ (麦)、ɸuŋ (釘)、uŋ (扇)、kubaŋ (クバ扇)、ɸuŋuŋ
(フクギ)、

*dzu の音消失と破擦音の鼻音化

miŋ (水)、karaŋ (髪)、

*dzi の音消失と破擦音の鼻音化

tun (妻)、

7.1.5. 有声子音化

無声子音の有声子音化は、*k>g、*p>b がみられる。いずれも語中での変化であり、語頭ではみられない。

7.1.5.1. 有声子音化／*k>g

taga (鷹)、hadaga (裸)、tagi (竹)、sagi (酒)、hatagi (畑)、bigi (あけり)、

mugu (婿)、sugu (底)、tagu (蛸)、kugunutji (九つ)、itigu (従兄弟)、igutzi (いくつ)、çagu (百)、φugun (フクギ)、

7.1.5.2. 有声子音化／*p>b

無声両唇破裂音の有声子音化 *p>b は、語中のみでみられる。語頭の *p は摩擦音化し、語中の *p は摩擦音化と有声子音化し、さらに弱化して消失している。したがって、*p>b は、語頭 *p の摩擦音化と語中 *p の音消失がおきたのちに借用された単語におきた変化であろう。

ubuni (大根)、duṅabu (世果報)、tubu (豆腐)、diba (簪)、

7.1.6. 喉頭音化

与那国語の喉頭音化は、語頭音節の脱落による第二音節目の無声破裂音の喉頭音化と摩擦音の破擦音化にともなう喉頭音化とがある。前者の脱落する語頭音節の母音は狭母音 *i、*u で、結合する子音は *p、*k、*ts、*s である。前者は、北琉球諸語にもみられるものだが、北琉球諸語の喉頭音化にくらべて与那国語のそれは、語例もおおしい、音消失する音節の種類もおおしい。

後者の喉頭音化は、与那国語に特徴的なもので、他の琉球諸語にはみられないものである。いっぽう、与那国語の喉頭音化には、語頭の母音音節の音消失にともなう鼻音、接近音、流音の喉頭音化はみられない。また、狭母音化にともなう発生した無声破裂音、無声破擦音の喉頭音化もみられないし、喉頭破裂音の発生もみられない。

7.1.6.1. 語頭音節の音消失にともなう喉頭音化

*pu、*pi、*ku、*ki、*tsu、*si、*su に無声破裂音、無声破擦音が後続する音環境で狭母音 *i、*u が無声音化し、弱化することによって語頭音節が消失して、

第2音節目の無声破裂音が喉頭音化してあらわれる。喉頭音化しない無声破裂音 t、k と喉頭音化した無声破裂音 t', k' へのフォネームの分離がおこなわれる。

*pu の音消失にともなう喉頭音化

k'u (肺)、t'a (蓋)、k'uru (袋)、t'a:tʃi (二つ)、t'ai (額)、

*pi の音消失にともなう喉頭音化

t'u (人)、t'u:tʃi (一つ)、t'ui (一人)、tzuma (昼間・正午)、

*tsu の音消失にともなう喉頭音化

k'a (柄)、k'uju (月、月夜に対応)、t'i (月)、k'imunu (漬物)、

*ku の音消失にともなう喉頭音化

t'i (口)、t'ibuni (口)、tza (草)、tzu (糞)、tzuri (薬)、

*ki の音消失にともなう喉頭音化

tzun (切る)、tzanun (切らない)、

*si の音消失にともなう喉頭音化

t'ara (下方)、t'a (舌)、tzan (虱)、tzu (白)、tzai (白アリ)、tzuiru (白色)、

*su の音消失にともなう喉頭音化

t'umit'i (朝)、

なお、語中では音消失にかかわらない破裂音も喉頭音化してあらわれる。おそらく、語中では喉頭／非喉頭の対立はないのではないかとかんがえる。

7.1.6.2. 摩擦音の破擦音化にともなう喉頭音化

無声摩擦音 s が破擦音化するとき、喉頭音化した歯茎破擦音であらわれる。なお、既存の破擦音 tʃi のうち語中の tʃ は破裂音化しているが、語頭の tʃ は破擦音のまま、喉頭音化してあらわれる傾向がある。喉頭音化しない無声破擦音との音韻的対立の有無については未確認である。

tʃima (島)、tʃitʃi (肉)、tʃiru (汁)、uttʃi (牛)、butʃi (節)、ɸutʃi (星)、
nutʃi (主)、mutʃi (虫)、kibuntʃi (煙)、
tʃi: (巢)、tʃitʃi (煤)、tʃini (脛)、tʃinanʃ (砂)、utʃi (臼)、tʃidiri (硯)、

7.2. s 音消失

与那国語に特徴的にみられる現象として、s 語幹動詞の語幹末子音 s の音消失

がみられる。このばあい、子音 *s* だけでなく結合する母音 *a*、*u* の消失、すなわち、*s* をふくむ音節 *sa*、*su* の消失もみられる。名詞のばあい、*kasa* (笠)、*afi* (汗)、*nsu* (味噌) のように語中 *s* の音消失はみられない。*s* 語幹動詞に限定される要因は未確認である。

utuŋ (落とす)、*ndaŋ* (出す)、*ndana* (出すな)、*turaŋ* (取らす・やる)、*utanaŋ* (落とさない)、*ndaŋuŋ~ndaŋū* (出さない)、*turaŋuŋ* (取らさない)、*utui* (落とせ)、*ndai* (出せ)、*turai* (取らせ)、

いっぽう、次の活用形には *fi* がみられる。結合する母音のちがいによるのか、活用形の語構成が特殊なのか、未確認である。語例をふやして確認したい。

utuŋaŋ (落とした)、*utuŋiti* (落として)、*utuŋi turai* (落としてくれ)、*ndaŋfi ku:* (出して来い)、*ndaŋfi nnini* (出してみろ)、

7.3. 音挿入

語例はすくないが、語末の音挿入と語中の音挿入がみられる。

7.3.1. 語末音挿入

与那国語には名詞のばあい、語末音挿入の語例は2例しか確認できていないが、否定動詞に語末音挿入がみられる。*nū* > *nuŋ* のような鼻母音の音分割がおきたものではないかとかんがえる。

nnuŋ (角)、*tidaŋ* (太陽)、*tubaŋuŋ* (飛ばない)、*kuŋaŋuŋ~kuŋaŋū* (潜がない)、*kunuŋ~kunū* (来ない)、*uriraŋuŋ* (降りない)、

7.3.2. 語中音挿入

duŋgu (道具)、*kibuntŋi* (煙)、

(かりまた・しげひさ 琉球大学法文学部)

【参考文献】

- ・上村幸雄『日本語の母音、子音、音節 調音運動の実験音声学的研究』国立国語研究所報告 100、共著、1990
- ・上村幸雄「音韻変化はどのようにしてひきおこされるか (2) - 琉球列島諸方言の

- ばあいー」『沖縄言語研究センター資料No.79』沖縄言語研究センター、1989
- ・上村幸雄『X線映画資料による母音の発音の研究、フォネーム研究序説』国立国語研究所報告 60、共著、1978
 - ・かりまたしげひさ「琉球語音韻変化の研究」『ことばの科学 12』むぎ書房、2009
 - ・かりまたしげひさ「琉球語のせま母音化の要因をかんがえる－空気力学的な条件と筋弾性的な条件－」『沖縄文化』100号、pp234～253、2006
 - ・かりまたしげひさ「大神島方言のフォネームについて」『日本語音声』琉球列島班研究成果報告書－琉球列島における音声の収集と研究－、1993
 - ・かりまたしげひさ「宮古大神島方言のフォネームについてのおぼえがき」『沖縄文化』78号、1993
 - ・宮城信勇『沖縄石垣方言辞典』沖縄タイムス社、2003
 - ・宮良當壯『八重山語彙』東洋文庫、1930